

上海国際都市等における生活実感と都市づくりに関する若干の考察について

Watanabe, Yoshiro / 渡辺, 與四郎

(出版者 / Publisher)

法政大学工学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学工学部研究集報 / 法政大学工学部研究集報

(巻 / Volume)

29

(開始ページ / Start Page)

141

(終了ページ / End Page)

158

(発行年 / Year)

1993-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003854>

上海国際都市等における生活実感と 都市づくりに関する若干の考察について

渡部 與四郎

Study on the keeping up life and urban projects in Shanghai International City, etc.

YOSHIRO WATANABE

Abstract

While I stayed at SHANGHAI about 6 months, 1992, I kept up the popular life and researched the method of urban construction. So, the 1st, this study is consisted of international urban character from daily living view point. Then, the 2nd, the study is consisted of the interesting method by economical technical development P.R.China. In conclusion, I think that SHANGHAI city was the growing vegetable organism eating insect in past times, but, in future, this city is able to reach the living parrel city for TOKYO City on developing axis of the east asiatic countries.

1. はじめに

日本における国土づくりの基本型として、現段階では第4次全国総合開発計画で云う「多核・多圏域のネットワーク社会」の実現においている。一方、世界都市となった東京圏に集中しつつある趨勢的な一極構造を、活力源とすることもやむをえないとする動きも根強いと考える。しかし、この目標と現実との乖離の中で、国民の望む経済大国から生活大国への熟成がうまくゆくか、懐疑的にならざるをえない状況下にあると云えよう。

視野をEC諸国に向け、その発展軸（ロンドン～ミラノ、延長約1千km）における都市システムの実在と共生的なあり方を考察する時、この東京一極集中構造を日本だけで解決するより、東アジアの発展軸上において、お互いに共生できるように改善することは、そろそろ時期をえた課題になりうるものとする。その場合、共生、併立できる都市圏として国際都市上海等が、その

候補になりうるのではないかと考えられる。

この上海特別市は、1991年現在、人口1283万人、面積6,340km²（茨城県に略々相当する面積）、市街地749km²、中心区280km²を有している。すなわち、国土960万km²、人口11.3億人の中国全土における最大の都市であり、重要な門戸となる複合機能を有している。この位置を日本側から視ると、長崎市から850kmの距離にあり、成田空港からは2時間45分の空路で到達できる近い処にある。

つまり、東アジアの発展軸は、図-1の如く中国の沿岸部を「弓」、揚子江流域部を「矢」と考えるならば、この弓矢型の中枢に上海市はあり、東京をはじめとする日本列島の主要都市は矢鏃部に当る構図となる。この事は揚子江流域（人口約4億人）の「矢本」と、日本列島の「矢鏃」は西太平洋から世界にはばたくことを意味する共生体として役割分担関係が育成、成立される可能性が大いにあるわけである。

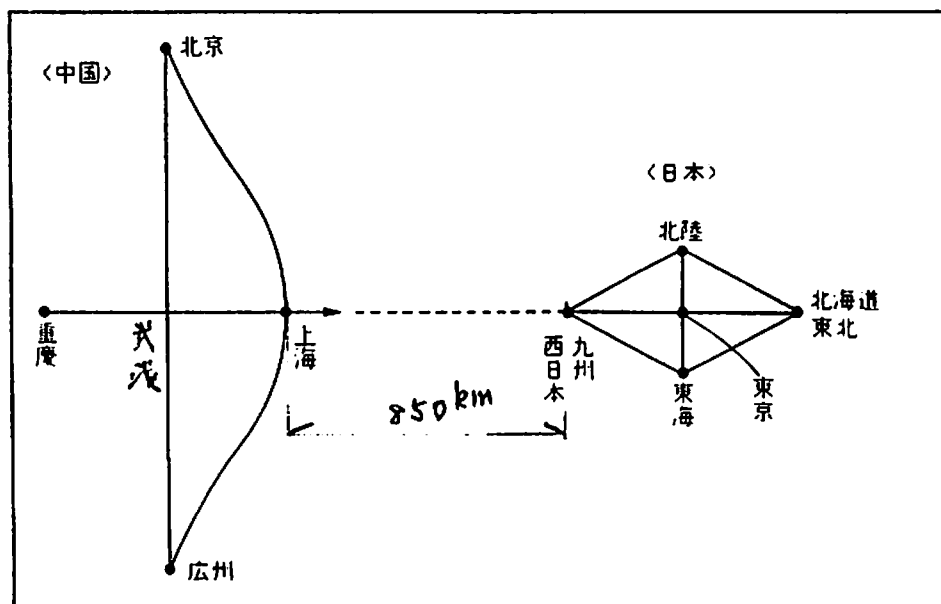


図-1 中国と日本の国づくり構図（東アジア発展軸）

2. 生活実感からの上海等中国主要都市の特性

2-1 特性把握の考え方

1992年3月5日から8月30日の約半年、法政大学在外研究員として中国上海の同済大学において「アジアにおける国際都市づくり方式」を合作研究して来た。その間、大学に隣接する同済新村内の専門家楼（foreign experts Building）で衣食住にわたる生活経験をし、周辺環境を味わい、また、調査研究をしながら、アジア人との信頼感、期待感も萌し合ってきたわけである。す

なわち、日記の中で表現されている毎日の営み、その中で思考した関心事を4分類（衣食住、環境、調査研究、アジア人としての信頼感）に分けて、夫々の強弱、その持続時間を計測することから都市特性の把握を試みようと考えたわけである。

つまり、第1の衣食住関係では、食部門での副食物の購入、飲料水の使用、暖房による寒さの克服等にわたる「健康性」の確保を要素と考えた。もちろん、買物に係る品質、鮮度への希望とその充足度も加味した。第2の環境関係では、交通規則の無秩序による交通安全度、交通の円滑性、公害的な悪臭、夜間における騒音等、周辺環境条件を重点とした。第3の調査研究関係では、文献の取得、研究調査時間、各種教示の充足等、研究成果に関わる点を志向することにした。第4に、アジア人としての信頼感、期待感関係では、私達に対する親切さ、旅の自由性、計画性に必要なサービス度等を重点としたのである。

これらの4分野について、5段階の強弱をつけることとした。すなわち、+2、+1、0、-1、-2とし、0は日本における平均都市レベルとした。また、+部門はそのレベルよりすぐれている点、-部門は悪いと思われる点を評価、判定することとした。また、それぞれの段階状況が持続している時間を計り、この両者の積をもって特性を表わすものと考えた。さらに、この両者の積を月、半年として加算し、全体（半年）としての平均値を算出し、これによって日本との比較衡量をすることとした。

もちろん、この都市特性におけるレベル格差は歴史的所産でもあり、一朝一夕では是正されるものではないが、3章で論述する都市づくりの結果、生れるであろう所得増、勤労者の近代化、やる気力によって克服できるものと思料する。また、4千年の文化交流、多くの人々から選ばれたすぐれた人達との接触、教示の機会をなお一層ふやすやり方も考察する必要があるわけである。

2-2 生活者からみた都市特性

この特性を表-1に示す。結論的には半年間の平均値では -0.097×24 時間であり、月別では3月が -0.75×24 時間、4月が $+0.16 \times 24$ 時間、5月が $+0.09 \times 24$ 時間、6月が -0.02×24 時間、7月が -0.12×24 時間、8月が $+0.14 \times 24$ 時間となった。すなわち、日本のそれよりは若干生活しにくいと評価されるが、3月は寒く、雨の多い期間が永く続き、専家楼の暖房がこわれていたのに、その代替するストーブを購入することが遅くなり、室内でもオーバーを着ていたという住環境の悪さが大きく影響したものと考えられる。しかし、気候がよくなり、魅力的な都市（杭州、蘇州、北京、大連）を訪問し、次第に調査研究が順調に伸展して来た4、5月になると、その評価値はよくなる。そして、6、7月になると、専家楼周辺の宿舍建設工事が徹夜作業で行われ、建設工事による騒音が連日連夜発生する状態が続いたことによる影響のため、評価値は悪くなる。8月になると、シルクロードのゆかりのある敦煌、西安、蘭州をやっと視察できた満足感と心が判って来た友人からの資料提供等、アジア人としての信頼感、期待感がふくらみ、いよいよ帰国する心理状態から評価点がよくなった事に寄与したと考えられる。

表-1 中国(上海等)における生活実感からの評価表(1992.3/5~8/30)

〔感度×時間(hr)
(5段階)(+2,+1,0-1-2)〕

月日	I	II	III	IV	平均
3/5	+1×2	-0×8	+1×1	+2×1	0.33×24
6	0×3	-1×18	0×1	-1×2	-0.83×24
7	0×3	0×17	+2×2	0×2	0.08×24
8	0×4	-1×17	0×1	-1×2	-0.79×24
9	-1×5	-1×17	+1×1	+1×1	-0.83×24
10	-1×3	-2×17	+2×3	+1×1	-0.54×24
11	-1×3	-2×17	+1×2	+1×2	-1.38×24
12	-1×3	-2×18	0×1	+1×2	-1.54×24
13	-1×3	-2×18	+1×1	+2×2	-1.42×24
14	-1×3	-1×18	+1×2	0×1	-0.79×24
15	-1×3	-1×18	+1×2	0×1	-0.79×24
16	-1×3	-1×18	0×2	0×1	-0.88×24
17	-1×4	-2×16	+1×3	-1×1	-1.42×24
18	-1×3	-2×16	+1×4	-1×1	-1.33×24
19	-1×4	-2×15	+1×4	+1×1	-1.21×24
20	-1×4	0×18	0×1	-1	-0.21×24
21	+1×4	0×13	+2×5	+1×2	0.67×24
22	0×3	-1×18	0×2	-1×1	-0.79×24
23	-1×3	0×16	+1×4	+2×1	0.13×24
24	0×3	-1×16	+1×3	+2×2	-0.38×24
25	-1×3	-1×16	+2×4	+1×1	-0.42×24
26	-2×3	-2×16	0×4	-1×1	-1.63×24
27	-1×4	-1×16	-1×2	-1×2	-1.00×24
28	-1×3	-2×16	-2×4	-1×1	-1.83×24
29	+1×5	-1×16	0×1	+2×2	-0.29×24
30	0×4	0×15	+1×4	+1×1	-1.21×24
31	-1×3	-2×16	+1×4	+2×1	-1.21×24
			<27日> 平均		-0.75×24
4/1	-1×3	-1×15	+1×4	+2×2	-0.42×24
2	-1×3	+1×16	+2×4	+2×1	0.96×24
3	0×4	0×15	+1×4	+1×1	0.21×24
4	0×4	-1×11	+1×1	0×8	-0.24×24
5	0×4	+1×17	+1×17	+1×2	0×1
6	-1×3	0×16	0×4	+1×1	-0.08×24
7	-3×3	0×14	+1×6	+2×1	0.21×24
8	-1×3	0×14	+1×6	-1×1	0.08×24
9	-1×3	-1×14	+1×5	+1×2	-0.42×24
10	+1×4	-1×12	+1×4	+1×4	0.00×24
11	+1×3	+1×14	1×6	+1×1	1.00×24
12	+1×3	-1×18	+2×2	-1×1	-0.50×24
13	-1×3	-1×15	+1×4	-2×2	-0.42×24
14	0×3	0×15	+1×5	0×1	0.21×24
15	-1×4	-1×15	+1×5	+1×1	0.75×24
16	0×3	0×15	+1×5	+1×1	0.25×24
17	-1×4	0×17	+1×2	0×1	-0.08×24
18	0×3	-1×16	+1×4	+1×2	-0.46×24
19	+1×4	+1×16	+1×2	+1×2	1.00×24

月日	I	II	III	IV	平均
20	0×3	0×16	+2×5	+1×1	0.46×24
21	+1×4	-1×12	+2×4	+2×4	0.33×24
22	+2×4	0×13	+2×3	+2×4	0.92×24
23	-0×3	-0×15	+1×5	+1×1	0.25×24
24	-1×3	-1×17	+1×3	-1×1	0.67×24
25	+1×2	0×8	0×1	+2×2	0.46×13
			<25日> 平均		0.16×24
5/2	+1×2	0×6	0×1	+2×2	0.54×11
3	0×4	+1×15	+1×4	0×1	0.79×24
4	0×3	0×15	+0×5	+1×1	0.04×24
5	0×3	0×15	+1×5	+1×1	0.25×24
6	0×4	0×16	+1×2	0×2	0.08×24
7	+1×3	+1×16	+1×4	+1×1	1.00×24
8	-1×4	+1×14	+1×3	+1×3	0.67×24
9	0×3	0×14	+1×5	-1×2	0.13×24
10	0×3	0×16	0×3	-1×2	-0.08×24
11	+1×3	+1×18	0×2	-1×1	0.83×24
12	-2×5	+1×15	+1×2	+1×2	0.38×24
13	-1×4	+1×13	+1×5	-2×2	0.42×24
14	-2×4	+1×15	+1×3	-1×2	0.33×24
15	+1×4	+1×16	+2×2	+0×2	1.00×24
16	+1×4	0×15	+1×3	+0×2	0.29×24
17	0×4	0×15	+1×4	+1×1	0.21×24
18	+1×4	+1×15	-1×4	+2×1	0.71×24
19	0×3	+1×16	+1×4	+1×1	0.88×24
20	0×3	-1×16	+1×4	+1×1	-0.46×24
21	0×3	-1×16	+1×4	+1×1	-0.46×24
22	0×4	-1×15	+1×3	-1×2	-0.58×24
23	+1×3	0×16	+1×4	-1×1	0.25×24
24	0×3	0×17	+1×2	0×2	0.08×24
25	+1×3	0×15	+1×4	+1×2	0.38×24
26	+1×4	-1×14	+1×4	-1×2	-0.42×24
27	0×3	-1×15	+1×4	+1×2	-0.38×24
28	-1×3	-2×16	0×4	0×1	-1.46×24
29	0×3	-2×14	+1×5	+1×2	-0.88×24
30	0×3	-1×15	+1×4	+1×2	-0.38×24
31	0×3	-2×17	+1×3	+1×1	-1.25×24
			<30日> 平均		0.09×24
6/1	0×3	0×15	+1×4	-1×2	0.08×24
2	0×3	+1×15	+1×4	+1×2	0.88×24
3	0×3	0×15	+1×4	+1×2	0.25×24
4	0×3	-1×16	+1×4	-1×1	-0.54×24
5	-1×4	-1×16	+1×2	-1×2	-0.83×24
6	+1×3	-1×15	+1×4	-2×2	-0.92×24
7	+2×4	+1×15	+1×4	-1×1	1.08×24
8	+1×4	+2×14	+2×5	+1×1	1.79×24
9	+1×4	+1×13	+1×5	+1×2	1.00×24

月 日	I	II	III	IV	平 均
6/10	0×3	0×15	+1×4	-1×2	0.08×24
11	0×3	0×16	+1×4	0×1	0.17×24
12	+1×4	-1×16	+1×2	-1×2	-0.42×24
13	0×3	-1×17	+1×2	+1×2	-0.54×24
14	0×3	-1×18	+1×2	-1×1	-0.71×24
15	-1×3	0×15	+1×4	-1×2	-0.04×24
16	+1×4	-1×13	+1×5	+1×2	-0.08×24
17	0×3	0×16	+1×4	0×1	0.17×24
18	0×3	0×15	+1×4	+1×2	0.25×24
19	0×4	0×16	+1×2	+1×2	0.17×24
20	0×3	+1×15	+1×4	+1×2	0.88×24
21	-1×3	-2×17	0×2	+1×2	-1.46×24
22	-1×3	-1×16	+1×4	-1×1	-0.83×24
23	0×4	-1×14	0×4	-2×2	-0.75×24
24	0×3	0×14	+1×5	-1×2	0.13×24
25	-1×3	0×15	+1×4	+1×2	0.13×24
26	+1×4	+1×14	+1×2	-1×4	0.63×24
27	+1×4	-1×14	1×3	-2×3	-0.54×24
28	-1×3	0×15	+1×4	-1×2	-0.04×24
29	0×3	0×15	+0×4	-1×2	-0.08×24
30	0×3	-1×15	+1×5	+1×1	-0.38×24
			<30日>	平均	-0.02×24
7/1	+1×4	-1×14	+1×4	+1×2	-0.17×24
2	0×3	0×15	+1×4	1×2	0.08×24
3	0×4	-1×16	+1×3	1×1	-0.58×24
4	0×3	0×15	+1×4	-1×2	0.08×24
5	0×4	-2×17	+1×1	-1×2	-1.46×24
6	0×3	-2×15	+1×5	-1×1	-1.08×24
7	+1×3	0×17	+1×2	-1×2	0.13×24
8	0×3	-1×16	+1×4	+1×1	-0.46×24
9	0×3	+1×15	+1×4	-1×2	0.71×24
10	0×3	-1×15	+1×5	0×1	-0.42×24
11	+1×4	-1×14	+1×3	+1×3	-0.17×24
12	+1×3	-1×17	+1×2	+2×2	-0.42×24
13	+1×4	0×11	+1×7	0×2	0.46×24
14	+1×4	-1×13	+2×4	+1×3	0.08×24
15	0×3	0×15	+1×4	-1×2	0.08×24
16	0×3	-1×15	+1×4	+1×2	-0.08×24
17	+1×4	-1×14	+1×4	+1×2	-0.17×24
18	+1×5	-1×13	+1×4	+1×2	-0.08×24
19	+1×4	+1×12	+1×4	+1×2	0.92×24
20	+1×3	0×15	+1×4	+1×2	0.38×24
21	0×2	-1×6	0×2	+2×2	-0.17×12
			<21日>	平均	-0.12×24
8/15	+1×3	-1×15	+1×2	+1×2	0.17×12
16	0×3	0×17	+1×2	-1×2	0.00×24
17	0×3	-1×16	+1×4	0×1	-0.50×24

月 日	I	II	III	IV	平 均
18	0×4	0×14	+1×3	+2×3	0.38×24
19	0×0	0×16	+1×4	0×1	0.17×24
20	+1×4	1×15	+1×4	0×1	-0.29×24
21	0×3	-1×16	+1×2	+1×3	0.46×24
22	+1×4	0×14	+1×5	+1×1	0.33×24
23	+1×4	0×12	+1×6	-1×2	0.33×24
24	+1×4	0×12	+2×7	0×1	0.75×24
25	0×4	+1×15	+2×3	+1×2	0.96×24
26	+1×4	0×13	+1×5	+1×2	0.46×24
27	0×3	-1×17	+1×2	+1×2	0.54×24
28	+1×3	+1×17	+2×3	+1×1	1.13×24
29	+1×3	-1×17	+1×3	+1×1	-0.42×24
30	+1×2	0×15	+1×4	+1×1	0.58×12
			<16日>	平均	0.14×24
			<149日>	平均	-0.097×24
					(-14.43/149日)

凡例 I 衣食住
II 環境
III 研究・調査
IV アジア人としての期待

分野別にみると、第2の環境が及ぼす寄与率が一番高く、61.8%であるが、マイナス要因が抜群に高いのが目立つ。次に第3の調査研究が与える寄与率が2番目で、18.6%であり、プラス要因が非常にたかいことが判る。さらに、第1の衣食住、第4のアジア人としての信頼感分野が略々同率(1割)で続き、プラス、マイナス要因が夫々相当量存在することが判る。この事から云えるのは、環境が悪くても、調査研究が相当やれたという事実認識とともに、もっと環境がよくなれば、調査研究はさらに充実したものになったのではないかという観測も浮上するわけである。

さらに、月別、分野別の特性変化を考察してみる。すなわち、3月は既述した様に、寒冷、かつ冷雨が続いた気候の中で、専家楼の暖房が故障し、代替できるヒーターの購入が遅れ、風邪を引くと云った事態、また、南京路等における人々の雑踏と排気ガス等による咽喉の痛み等による「健康」の阻害が最大の問題を提供している。しかし、折角、同済大学に研究調査に来て、親切な顔馴みの人に会え、かつ、中国の由緒ある図書館内で、豊かな研究資料に接することができた充実感がこれに次ぐプラスの因子となっていると考えられる。

4月になると、3月の健康の阻害が次第に減じ、調査研究のリズムが順調になって来て、学生、委員会等で日本の都市計画、地下利用(共同溝等)を教えることによる共感が生れて来たと考えられる。5月になると、環境に対して自然が招来する陽気回復によってプラス面も多くなり、公害となる騒音、匂等のマイナス面との差が少なくなり、中国の土木学会、城市計画学会を通して、多くの学友に接することができた喜びを感じることによる影響が出て来たと考えられる。

6月になると、専家楼附近の建築工事が連日連夜、喧ましく続けられ、その騒音のため、早寝早起の中でもねむりが浅く、心身ともだるくなって元気がなくなる状態による悪影響と、桂林、南京を訪れ、その代表的風光とその土地で健闘している人々、歴史的文物に接しえた生甲斐感によるプラス面が生じたものと考えられる。7月になると、6月以上に建築工事が強行された事による騒音が続く、環境上のマイナス面が大となったこと、そして揚州、鎮江という大運河地帯を訪れたこと、さらにオランダの国際地下利用会議への出席のため、提出論文を日本と連絡をとりつつその作成に頑張った充実感によるものと考えられる。8月になると、7月に続く建築騒音と暑さ、そして匂(下肥)等による環境悪化と、西安、敦煌、蘭州のシルクロード、黄河流域を見学し、歴史的建造物、風土に合致した都市づくりについて学術交流をなしたことの影響がプラス面になっているものとする。(表-2参照)

表-2 生活者からみた中国（上海等）の月別、分野別都市特性評価表

月	分野	I (衣・食・住)	II (環 境)	III (研究・調査)	IV (アジア人としての特)	Σ (I、II、III、IV)	備 考
3		+11 -23	0 -496	+63 -10	+29 -12	+103 -541	27日間
4		+28 -32	+80 -128	+103 0	+43 -9	+254 -169	25日間
5		+30 -29	+153 -185	+89 -4	+28 -18	+300 -236	30日間
6		+35 -19	+100 -204	+100 0	+22 -35	+257 -258	30日間
7		+38 0	+27 -217	+88 0	+27 -14	+180 -231	21日間
8		+31 0	+32 -86	+59 0	+22 -5	+144 -91	16日間
計		+173 -103	+392 -1,316	+502 -14	+171 -93	+1238 -1,526	149日間

2-3 生活実感からの課題と改善策

上海を主体として、短期間ではあったが、蘇州、杭州、北京、大連、桂林、揚州、鎮江、西安、敦煌、蘭州を見聞することができた。これらの都市は中国らしさを有しつつ、近代化を進めているが、アメニティ面では一様に問題を多く抱えている状況は既述の如く明らかである。また、意見交換できた人々は心豊かで、人間性のある奥の広さを感じさせる人物が多かったのも事実であった。

しかし、一般の人々を通して見る実感からは、いくつかの不透明さ、不可解さが残った。これらに絡む問題提起をし、その改善方式を提案してみたい。すなわち、問題点の第1は、住環境の改善、交通ルールの確立が求められることである。第2に、計画的な物事の処理、安心感を与える対応システムをつくることがすゝめられる事である。第3に、清潔で、多様性ある食物等の確保ができるシステムに変えることである。第4に、国内、国外との交流について手続きの迅速化、確実さが求められることである。以下、これらの問題点毎に、その解決のすゝめ方を述べる。

第1の課題解決のためには、施設面の改良をはかるための財源を求める経済面での対応とともに、交通面では交通安全と円滑化をはかる社会教育を、さらに行なうことがすゝめられる。このため、後述する経済技術開発のモデル事業だけでなく、現在稼働中の企業（公司）についても、その能率性、品質管理について国際的レベルからの見直し、改善が必要となろう。また、交通ルー

ル改善用P.Rとしてテレビ等で社会教育がなされているが、交通信号、横断施設の整備と連動とともに、歩行者ルールについては児童教育からなさるべきであろう。

第2、第4の課題対応としては、永年の慣習とお国柄から一朝一夕に直すことは難しいかも知れないが、国際都市づくりはいろいろの外国人との共同作戦と信頼関係でなされるべき面が強くなるので、目標としてはE.Cのやり方を模範にすることが望まれる。その目標に向かって段階的に改善することとなろうが、少くとも国内旅行が国際旅行以上に行動の確実なシステム化がはかれるように直すべきである。

第3の課題対応としては、流通機構を調査し、いわゆる自由市場、国営市場を総合化し、良いものが何処で売られているか等の情報を流すことが大事になろう。その間、代表的商店街をループ的に循環するバスネットワークの運営等の配慮がなされることがすゝめられるのである。

3 各種経済技術開発方式からみた国際都市づくりへの途

3-1 「食虫大植物」的な上海の歴史と実在

上海は700年の歴史を有している。1291年上海地域の一部に「滬城」が造られたのが発端である。その当時「滬城八景」というイメージがうたわれたが、その中に「海天旭日」という言葉がある。この「海天旭日」は現在の上海に繋がり、今なお綿々と上海に、その気概は実在していると考える。

さて、1840年阿片戦争が起こり、南京条約の結果、1843年上海は開港することとなる。その時期から「華洋雑居」（中国人と西洋人が混住する）時代がはじまり、やがて、英、仏、日、米の租界が設定されてゆく。因みに、英仏租界は商業、業務地を、日米租界は工業、居住地を主体とする土地利用が形成され、各種産業振興上のきっかけをつくることになった。

1991年の辛亥革命、1914～18年の第1次世界大戦を経て、1924年上海は国民政府によって特別市として認められた。その間、工業が各分野にわたり進展し、中国全域、とくに浙江、福建省等の沿岸地域からの社会増人口を受け入れ、大上海地域計画を樹立せざるをえない大都市へと成長してゆくのである。

1927年から49年までは、日中関係の不幸な時代であった。1937年の支那事変の勃発、41年の第2次世界大戦への突入、そして1945年の終息、その後国民政府と人民共和国との抗争を経て、今日につながる1949年から解放時代を迎えたのである。

この解放宣言とともに、中国は内陸都市における工業化を、自国の近代化と安定的成長のために行なって来たが、1980年代になると世界への輸出産業基地として、沿岸部の急速なる開発がとり上げられることとなる。すなわち、深圳、大連、上海をはじめ18都市を超える都市地域で、経済技術開発区を設定し、公共投資、税制等の優遇措置を講じ、先端技術産業等を育成しつつあるのである。

この様な流れの中で、開発に当り、国有地ではあるが、50～70年の長期にわたる土地使用権の

設定を認め、企業所得税、地方所得税、関税と地方統一税、個人所得税、国外送金所得税、再投資の優遇政策、特別扱いの所得税の各面にわたる外国企業への優遇政策を展開している。さらに、証券取引所を深圳、上海で開設するなど、社会主義国家ではあるが、市場原理を導入する等、いわゆる「積極的穏当政策」「実事方式（有効に外資を投入し、連合して開発する場合、部分的開発、譲渡によって収益をあげ、次の段階に必要な開発を順次行なう方式）による開発政策」がとられているのである。

しかし、省毎の閉鎖的な人口管理（例えば、上海の大学を卒業しても、本籍地の省内の企業で働くことを義務付けられる制度）、一人子運動という制約（2人目を生むと5千元の罰金をとられる。ただし少数民族は例外が適用される。）、低所得水準（全国平均360ドル、上海平均1千ドル程度）等が抱えている現実を、よく検討する必要がある。なお、以上の制度については実在の求めるニーズによって、弾力的に運用されるのではないかと有識者の見解もあるし、低所得水準下で衣食住は安定的に国家が保証されているとのメリットとともに、証券取引所の過熱した群集流等からも判るように、いろいろの手段によってお金を貯めている現実について直視する必要がある、つまり、中国人はよく働き、頭の切れる人も多く、根性と弾力性ある対応ができる民族であることは、人防計画と云われる地下シェルター施設の多目的活用（台湾資本の導入による娯楽等の機能への貸与）から伺えるわけである。

3-2 現在進行中の経済技術開発方式とその特質

既述した「弓矢型」という中国の発展パターンを構成する18都市を超える都市地域に、今日から明日にかけて中国の近代化を牽引する経済技術開発区が設定されている、近年では沿海部、揚子江流域の開発意欲はすさまじいものがある。なお、これらの対象となる経済技術開発区の面積は2～350km²といった大小様々の規模である。その中で注目されているのは、深圳（98km²）、大連（20km²）、上海（浦東350km²、漕河涇160km²、閔行210km²、虹橋65km²）である。今回、実地検証ができた大連、上海市での当該区における具体的内容とその特質を述べることにする。

さて、大連市の経済技術開発区は都心から27km離れた大孤山半島の臨海部に在る。その発足は1984年であり、目下10km²が工事中で、完成した街区には各種の企業が立地しつつある。この開発区において土地使用者（25ドル/m²、50年）を設定し、ハイテク企業を主軸とする工業開発を意図している。しかし、実在している企業は基幹的工場は未だ立地して居らず、事業関連というか、工事従業員に直結し、市民にもサービスする様な商業、レクリエーション的なものも多く見受けられた。そこで気になったのは、その半分位が「開店休業」的であった点である。工業面で視察、ヒヤリングをした日中合弁による毛皮工場、そして大豆製油工場の責任者（日本人）の話では、労賃の安さ、労働力の豊かさ、農産資源の豊かさ等を考慮して立地したが、前者では公共施設（下水道等）整備の不充分さ、後者では原料輸送等の物流（貨車の計画的配車）の弱さ等にネックが生じて、生産の向上がはかりにくい等の問題点の指摘がなされた。つまり、立派な模型によって開発区の完成図をPRしているが、基幹的なハイテク産業は誘致できず、これを抜きにして、

できる所から部分的開発によって次なる開発を行うといった「実事方式」による実態そのものが大きな問題をはらんでいると考えさせられた。(図-2 参照)

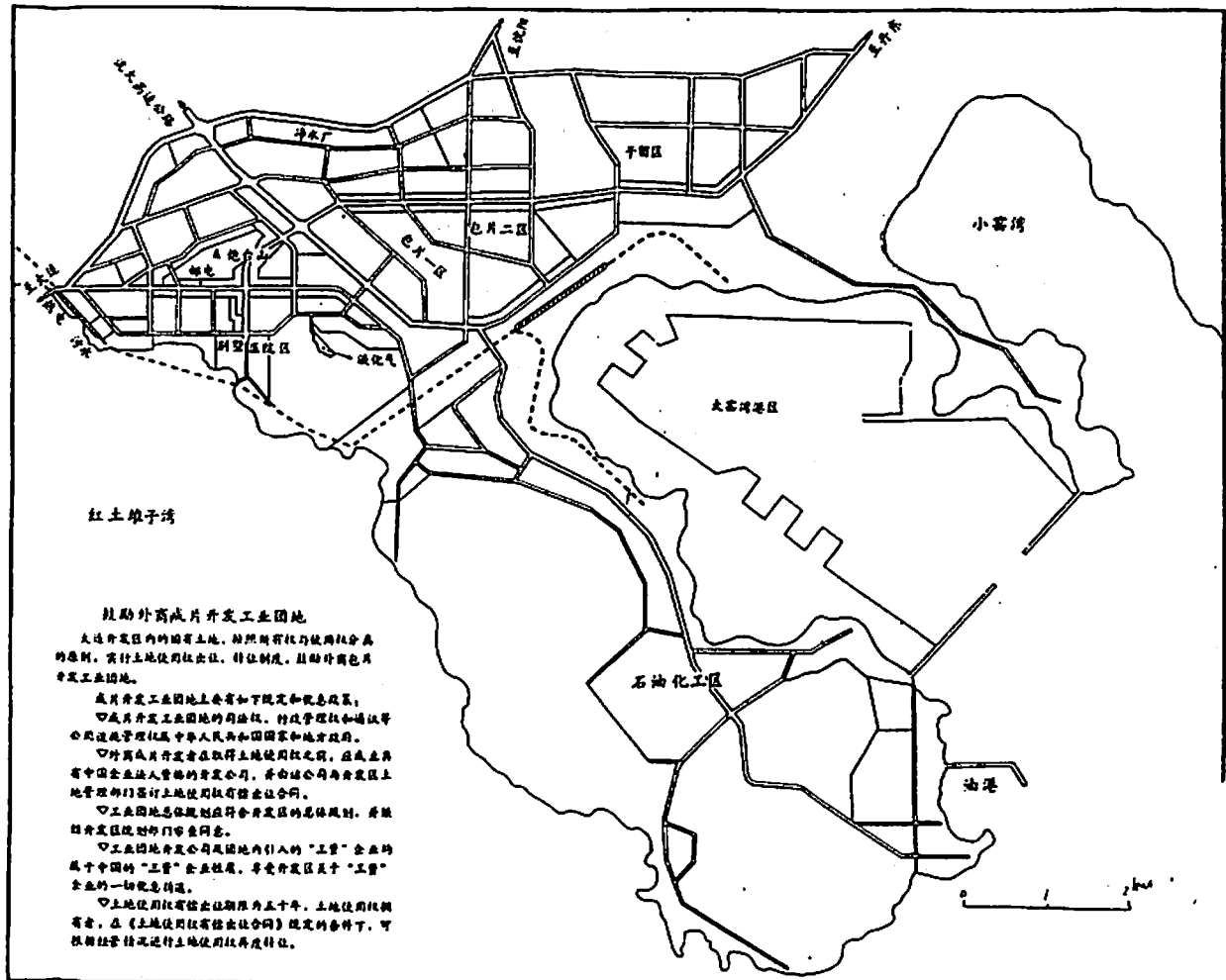


図-2 大連経済技術開発区

本題である上海市の主たる経済技術開発区は浦東新区(350km²)という広大な黄浦江右岸地域にある。この中に5分区(面積202km²)の職住近接型開発が、带状組団パターンで行われつつある。すなわち、陸家嘴一花木分区(28km²)は浦西・外灘地区にある現都心と併立する新都心として計画され、国際的金融、貿易機能を志向し、商業の充実、文化博覧会も企画している。また、外高橋分区(73km²)は揚子江沿岸部にあり、2,5万トン級の船舶が接岸可能である臨海工業地を保税區を含んで企画している。この企画、計画作成には日本のJICAの力を借りているわけである。さらに、慶寧寺一金橋分区(31km²)は外資系企業による輸出加工を目指すことになるが、その位置は以上2分区の中間にある。これら3分区は基本的計画が定まり、実施計画段階に移行しつつあると云えよう。この他、周家渡一六里分区(39km²)では既成市街地内の工場を受け入れる基地を企画し、北蔡一張江分区(31km²)では科学教育、高等技術のための新興工業区を企画しているが、これらに関連して国際第2空港計画も重要視されることになるだろう。

以上5分区の中、陸家嘴一花木、外高橋、慶寧寺一金橋の3分区に対して、450億元（約1兆円）の投資（公共分200億元、企業分250億元）が実施予定になっている、その中主要な公共公益投資として、140億元が黄浦江の架橋（一橋は完成）、内環状道路（相当区間は高架構造）等の幹線道路新設、外高橋港（揚子江からの掘込港）の建設、ガス、発電所、上水道（浄水場を含む）、通信、污水处理場の建設にわたる10大プロジェクトに投入されている。

なお、この遂行に当っては柔軟なやり方であり、その基本となっている現計画は3案から消去法で選択されたもので、浦西地域に展開している超過密の都心構成を、この浦東新区を種地として是正するために、偏心パターンを採用したものである。因みに、土地所有権は50～70年で設定され、その単価は外高橋、慶寧寺一金橋分区で60元/㎡、陸家嘴一花木分区で512元/㎡と土地利用計画に即応させて居り、この所有権の1/3相当分は国務院から支援され、当該開発区に使われているのである。（図－3 参照）

この浦東新区開発事業の先駆的な役割を果たして来たのが、1983年から始められた、閔行、虹橋、漕河涇という3経済技術開発区である。すなわち、閔行地区は衛星都市的な性格で、工業と住宅とを併せもち、杭州湾の近く存在するもので、総合的な輸出産業を目指し、緑豊かな新都市を形成している。次に、虹橋地区はメッセ（Messe）的な機能を有し、上海国際空港に近接して立地して居り、そのキー・ポイント（key point）は上海にある諸外国の総領事館をすべて集合させ、当該の国々に適合するニーズに合致させて、交易上の拠点に仕立て上げようとするものであり、その施設内容は展示、会議場、ホテル、ゴルフ場等、多彩なものである。第3番目の漕河涇地区は研究開発（エレクトロニクス、コンピューター・ソフト、光ファイバー、バイオテクノロジー）を媒介として成長産業を外国資本と提携して、先端技術産業の核にさせる区で、国際空港、大学群、研究所等との近接的立地条件と、優秀で安価で豊かな頭脳集団を活用しているものであり、さらに、その規模を拡大中のものである。（表－3 参照）

以上の経済技術開発方式は多彩な分野にわたっているが、共通的なことは極力外資を導入して農地等を工業、オフィス、研究開発等の用途に転換し、導入された企業に長年月の土地所有権を認め、税制等の優遇措置（大連の場合と同様）を講じていることである。その際、日本の場合で問題となる所要の土地取得については、中国の場合、その土地所有権は国が有し、その指導者の中枢である国務院が批准した、これら当該事業の実施に当り、農民の住宅、農地、職業斡旋等に配慮し、興味ある助成策を行いつつ、円滑に遂行している。この場合、農地については個々の農民に対応するのではなく、「郷村」（上海市には190の郷がある）単位に、土地生産性の向上をはかることにつながる土地改良面での支援を行なっている。

图-3 上海市浦东新区总体规画示意图

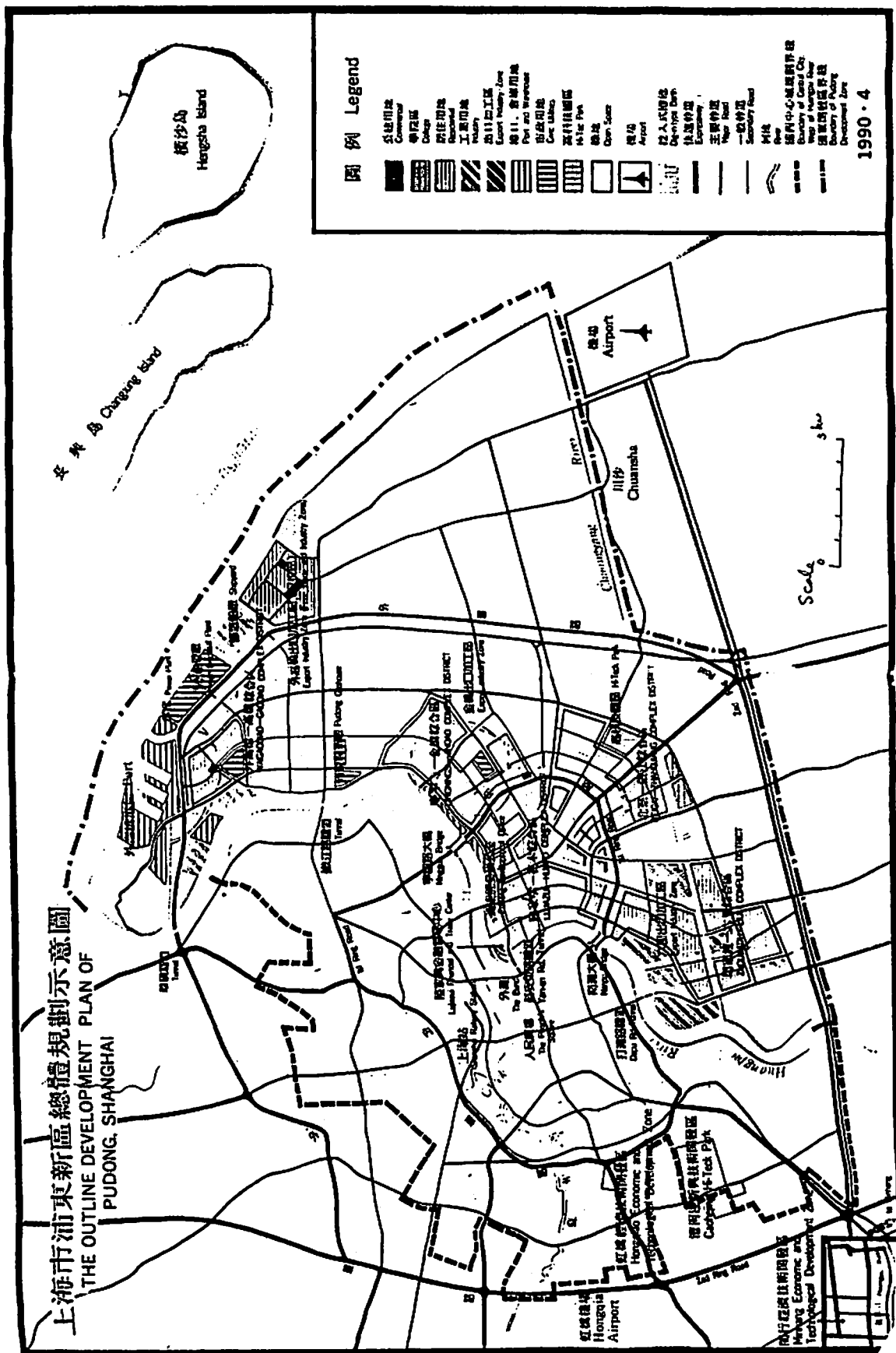


表-3 上海市経済技術開発比比較表（優遇の税制は除く）

地 区 名	漕河涇（160～500ha）	閔行（210ha）	虹橋（65.2ha）
ヒヤリング公司	漕河涇振興技術開発区発展総公司（R & D）	閔行経済技術開発区聯合発展有限公司（衛星工業）	虹橋聯合発展有限公司（第3次産業展示）
設 立 の 背 景	マイクロエレクトロニクス（ベルギー・オランダ・フランスとの合併公司）、コンピューター、ソフトウェア（アメリカ・オランダ）、パキスタンテクノロジー関係のハイテク産業を上海の各大学、開発区が協議し、本地区が5候補区から選ばれる。 選定理由は、空港との距離、空気・水のきれいさ、大学・研究所等の人材の確保、公共的初期投資の少なさ等である。	1983年以前に発電機工場があり、変電所、下水道、文教施設、ガス供給等のインフラに恵まれた立地条件を活用する。輸出産業で総合的なものを目指す。香港・日本・アメリカの外資を受入れる。衛星都市的な位置にあり、長期には杭州湾開発とも連動できる。	1980年代はじめ、深圳川開発が発足したのに刺激され、上海市の目指す第3次産業の拠点として、1985年、合併会社（中英集団25%、中国銀行25%、国営公司50%）ができる。 その特徴として、上海市はある各国の総領事館を一同にまとめ、国際展示、金融サービス業、マンションの住宅供給も考える。
計 画 ・ 業 務 の 内 容	従業員4万人、合併会社64社、中国系150社、投資額3.6億ドル、生産額4.6億ドル、輸出額6千万ドル。 最近は、台湾投資が多い。 有望な業種はComputer Softwareや大口径の光ファイバーである。	従業員3万人（生活区に7万人）85社（但し開業は65社） 生産額4億ドル サービスセンターとしてテニス、ボーリング、釣り、宿舎がある。 有望企業は、電気スイッチ（土地1万㎡、従業員千人、日本系資本）、トイレ用陶器（中米向け）である。	外資企業によって、オフィス（国際貿易センター、展示センター）、ホテル、娯楽（夜、中国の歴史劇、ゴルフ）、マンション、園地緑化（別荘付）を計画・実施中である。 keyとなる「総領事館の一団化」は遅れている（本格化していない）。
特 色 と 課 題	頭脳立地であり、安く、よく働く従業員に依存する。情報交換、輸出等の手続きには、中心部にあるホテル兼用サービス施設が役立っている。もとの農民対策には新しい住宅を提供し、後継者たる青年には、新雇用（市内の会社）を幹施する。	物流については、黄浦江からコンテナ、鉄道、道路（快速道路）による。労働力立地型であるが、訓練は必要である。 上海中心地からの逆流的通勤は不可能（通勤鉄道システムになれば可能）。	有効に外資を投入し、聯合により開発する。部分的開発、譲渡により収益をあげ、次の開発を行う「実事方式」―浦東新区との対抗・共生ができるか（虹橋空港に依存して成立する）。

3-3 評価と今後の展望

都市づくりに関しては、1989年12月成立した中国・都市計画法 (City planning Act of the People's Republic of China) が各面で指導的な役割を果たすことになっている。その第1条は次のとおりである。「この法律は都市の規模、発展方向を定め、都市の経済的、社会的開発目標を実現し、社会主義者を近代化させる開発ニーズに合致させるよう、都市計画を図示し、その建設を推進させる事を成り立たせるものである。」この様に、はっきりした内容をうたっているが、不幸にして特定した都市以外、このマスタープランにお目にかゝっていないし、多分、現在作成中か調整中かのいずれかであろうと考えられる。上海の場合は図-3の「上海市浦東新区総体規画示意图」がこれに該当するものと考えられるが、絶えず、手直しが弾力的に行われているようである。

さて、中国の国際都市づくりにおいて考えるべきことは次の3点に搾られる。すなわち、第1に当該都市に関し、世界なりアジアなりの未来を考察できる、すぐれた「人材(外国人を含む)」の定期的な交流と定住により、国民大衆に開かれた、よき情報を与え、善導できるシステムが求められることである。このため、これら人材が当該都市において、アメニティある生活環境を享受し、その行動に対する自由性、スケジュール性をたかめる事が求められるとともに、市民全体において「沒有(メイ・ヨー)」的気持の払拭によって、環境上の健康性の回復と、意識の改革が必要となろう。

第2に、当該都市圏を永続的に発展させるため、また市民全体への同等なるサービスを賦与させるため、基幹的産業の育成によって生ずる基盤をつくる「投資力」の涵養と広域圏にわたるアメニティある都市計画を樹立し、その成果を全ての人々に明示することが大切となる。この基幹的産業としては、研究開発、国際的(とくにアジアから第3世界を目途とする)展示、交易を新しい軸として先端的第2次産業、及び1、5次産業を包含する総合性、整合性ある進展をはかれる産業が求められよう。このため、東アジアの拠点的作用にも寄与する国際第2空港、及び北京オリンピックとの合せ技、合力関係による万国博覧会の開催等が企画されてよい段階に来たと考えられる。(図-4、5参照)

図-4 大上海圏整序構想図

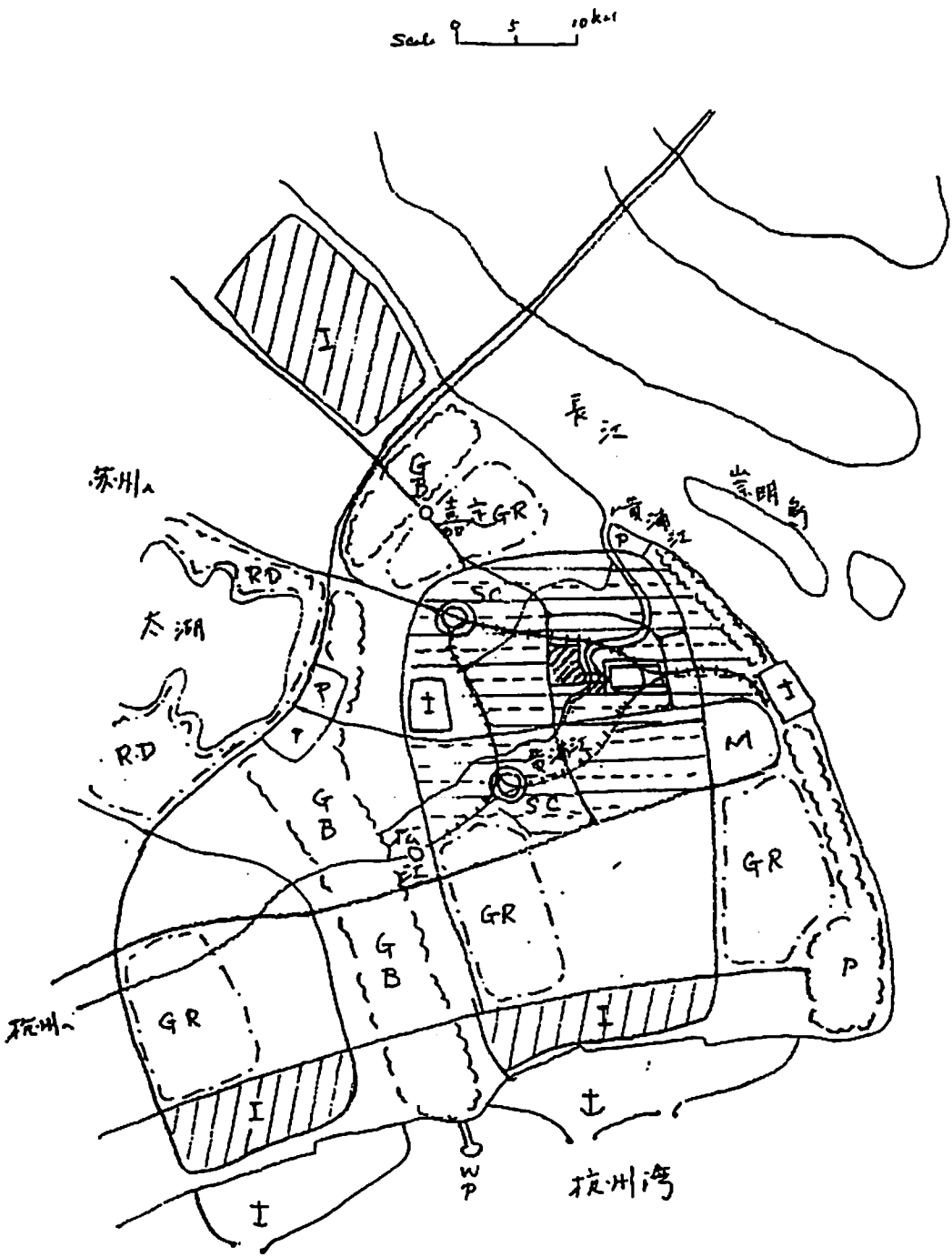
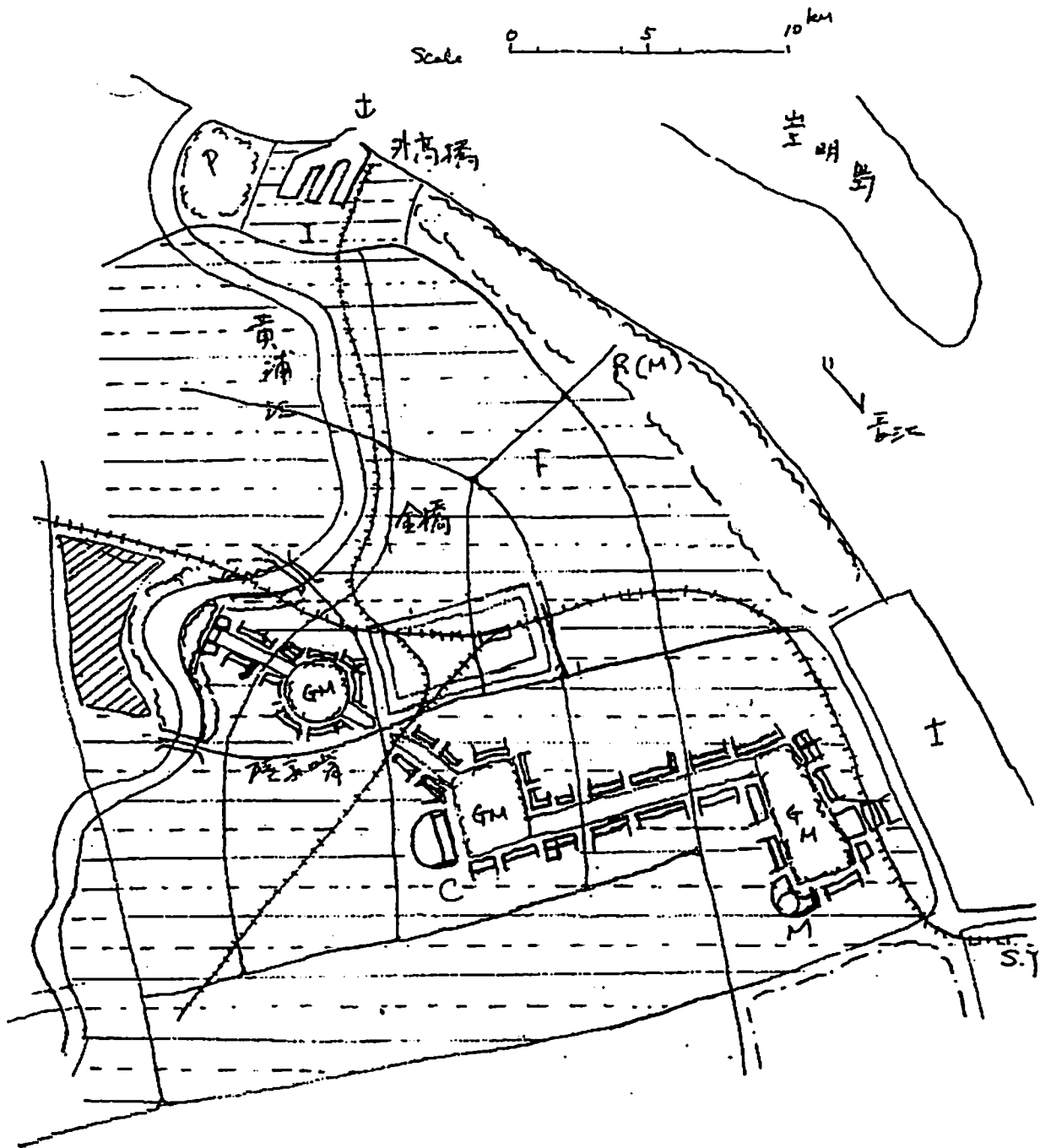


図-5 浦東地域未来図



凡例

- | | | | | | |
|-----|-------------|----|------------|----|--------------|
| P | 公園 (テーマパーク) | | 現都心→新都心 | M | : メッセ (貿易展示) |
| WP | 海の多目的ピア | | 副都心 | C | : 国際区 (展示会議) |
| — | 幹線道路 | | 整序区域 (市街地) | GR | : 緑住区 |
| +++ | 鉄道 | GB | 緑地帯 (計画的) | RD | : 研究開発区 |
| | | | | I | : 工業区 |

第3に、世界、とくに東アジア、発展途上国を主体とした第3世界において、主導的役割分担とその存在感を提示できる「総合的な情報発信源」に成長させる事が求められる。中国は第3世界と称せられる国々と活潑なる交流を行なっているが、これらの国々が所要し、民度に適合するノウハウ（Know how）を各面にわたって創り、伝達できる「開かれた研究開発、応用機構」を日本を含む東アジア諸国の連携の下で、新しく樹立することが大事である。この一環として、東アジアの発展軸上にある都市連合による役割共生と、環東支那海沿岸地域の研究コンプレックス（Complex）の形成、そしてアメニティある生活、活動の都市として、上海を更新することが所要される。

4 まとめと今後の課題

6ヵ月の在外研究員として、その生活実感から旅行者でない「上海市の実態」を味い、そして同済大学日本学研究所の一角で、中国独特の「経済技術開発方式」を調査、研究し、中国の友人と国際都市づくりのあり方、すゝめ方を合作研究した次第である。この合作研究の前駆として（財）国土計画協会における「海外の国土計画」を調査検討し、とくに「ヨーロッパの国土計画」を研究して来た事（社）日本都市計画学会・日中交流委員長としての交流調査実績が役立っているわけである。就中、言葉のことでは同済大学地下空間中心の東昱、彭方楽先生に多大なる応援をうけたことを感謝したい。

以上の御蔭の下で、まとめとして云いたいことを当面的な事柄を含めて列挙して見る。

- 1) 国民としての立場を超えて、「アジア人」として共生的立場で暖かく考え合う関係組織をつくり、弟子を育て、末広がりの運営すること。このための基金、人材の結合が課題となる。
- 2) 連携し合う都市地域に生活し、活動する人々の意識を全般的、定期的に調査し、その成果を交換すること。とくに、次代を担う若年層の意識調査を同一レベルで行うことが課題となる。
- 3) 「近くて遠いアジア」の現状を打破するため、ECを目標として、着実に改善すること。とくに、国内旅行の自由性、スケジュール性を回復するための開かれた手続上の改善から始める事が課題となる。すなわち、往復切符の購入、ホテルの予約が事前にできる事が大切となる。
- 4) 地図、とくに都市計画図の販売が求められる。戦争の不幸な時期は終わり、平和、共生の時代における一般人へのデータ提供が課題となる。地図を入手できることはその第1歩となろう。

参考資料一覧

- ① 1991上海統計年鑑——中国統計出版社(1992)
- ② 中国東部沿海城市的發展規律及經濟技術開發區的規畫——同済大学出版社(1992)
- ③ 中国城市建設史——中国建筑工業出版社(1981年)
- ④ 中国概況——北京外文出版社(1987年)

- ⑤ 実用省市地県現代規画——光明日報出版社(1988年)
- ⑥ China City Planning Review—The China Urban Planning Society and China Academy of Urban Planning and Design (1991)
- ⑦ 上海—浦東経済改革政策和基礎設施規画研究—上海市、アジア開発銀行
- ⑧ 上海建設1986～90——上海科学普及出版社
- ⑨ '91上海市房地產市場 (Shanghai Real Estate Market) —上海市統計局編
- ⑩ 上海市交通調査与分析——同済大学、上海市(1988)
- ⑪ 繁荣上海城市科学(14)——宋兵、陸錫明
- ⑫ 上海700年：1291—1991——上海研究中心、上海人民出版社編(1991)
- ⑬ 近代上海城市研究——上海人民出版社(張仲礼主権)(1990)
- ⑭ 大阪における都市開発情報を基にした国際貢献等についての調査研究(上海浦東新区開発計画へ“なにわ”からのプロポーズ)——(財)大阪21世紀協会(1992)